

「学校関係者評価結果」及び「今後の改善方策」

学校関係者評価結果 （令和5年2月9日 13:30～ 実施）

授業参観の感想から

- 教師について
 - ・学年に応じて自分たちで考えて主体性をもたせていたのがよかった。
 - ・一人ずつ得意なことを発表する形態は、一人一人が目立っていてよかった。
 - ・特別支援学級では教師がしゃがんで子どもの目線に寄り添っていた。そのおかげで児童が自信をもって発表し、保護者は感動して涙を流していた。
- 児童について
 - ・大きな声で人前で話せる力や落ち着いて友達の発表を聞く力がついていく。日々の積み重ねを感じた。
 - ・思わず涙が出た子の背中を、隣の児童がさすっていた姿がすばらしい。
 - ・あいさつをしっかりと返してくれる。
- 保護者について
 - ・保護者が参観授業を大切にしようとしていて、とても静かであった。自分の子の発表が終わっても緊張の糸が切れていなかった。

今後の改善方策

今回の学校関係者評価は学校運営委員6人に、授業参観も含めて評価してもらった。参観での感想では、たくさんのお褒めの言葉をいただいたが、気を緩めることなく『自己評価結果を踏まえての「今後の改善方策」』（次頁）で述べている事柄について、次年度は実践を重ね、愛日教育をより進めていきたい。

自己評価結果を踏まえての「今後の改善方策」

「教員の自己評価結果」の考察で、次の3点を課題として挙げた。『1つは、児童の生活習慣の定着や学校の規則の順守について教員からの評価が低下（A評価10%未満）したことである。これは児童自身の自己評価とも合致し、早急な子どもたちへの意識づけと教職員による働きかけが必要である。2つ目は、「保護者の相談に適切に対応」することに困難さを感じている教員の増加である。これは、ハイセンシティブな児童の割合の増加やそれに伴う保護者からの相談内容の多様化・複雑化に起因するものであり、対応できる相談機関の紹介や開拓を引き続き行っていく必要がある。3つめは、教員と保護者の「いじめのない集団作り」でのA評価の乖離である。これは、保護者が学校での子どもたちの様子を見る機会や保護者と教員の情報交換の場が減少した不安感が原因ではないかと考える。』と記した。これらに関わる改善方策として以下のような事柄をあげる。

- ① 「GIGAスクール構想」と「統合型校務支援システム」が本格的に始動し始めた。次世代の学校・教育現場を目指しての大転換である。昨年度は、児童の学び支援や教員間の知見の共有や生成、校務の効率化に関する研修を効率を考えながら繰り返し行い、教員がシステムやタブレットPCを自在に使えるようになってきた。校務支援システムは教員の働き方改革に寄与するものであり、一人1台のタブレットは個々の児童の学習支援に役立っている。今後も積極的な活用を心がけたい。
- ② 佐古小学校では「教員の世代交代」に対応するために、すべての教職員が初任者や教職経験の浅い教員を一丸となって見守り、関わっている。その結果、「経験に裏打ちされた子どもの教育に関わる教育技術や財産」が引き継がれ、また、若い世代のフレッシュな感覚や情報リテラシーに組織がよい刺激を受けている実感がある。コロナ禍で新しい生活様式が続く中、来年度も「チーム佐古」を合い言葉に、新しいシステムや教育技術・関連機関の情報を取り入れ、教職員が互いに切磋琢磨しながら愛日教育を進めていきたい。
- ③ 児童に「望ましい生活習慣」を身に付けさせるためには、今後も道德教育等を推し進め、身近な大人や上級生が各児童の心の琴線に触れる言動を行い、よいモデルとなる必要がある。さらに、音楽を通して豊かな感性を育てる情操教育や保護者とともに参加できる行事の復活により、児童が自分の生活の仕方に自信をつけ、学校内外での実践につなげていきたい。

